埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第31集

町田西遺跡

1991.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第31集

町田西遺跡

1991.3
深谷市教育委員会

序

最近の新聞記事や報道番組には、遺跡発掘の話題が多く見受けられますが、その背景には各種開発に伴う発掘調査の急激な増加という現実があります。深谷市においても、この傾向は益々顕著なものとなってきており、発掘調査地である町田周辺も、国道17号線深谷バイパスの開通を契機とする開発地域となりつつあります。

本報告書は、豊里地区において、市教育委員会が主体となって実施した初の本格的発掘調査の成果報告であります。豊里地区は、近代日本経済界の偉人であり、社会福祉事業等の優れた推進者でもあった渋沢栄一翁や、翁の学問の師でもあった尾高藍香の生地として知られておりますが、今回はこの地における、約1,400年前から約600年前の人々の生活の痕跡を確認いたしました。未来の生活を築く開発が遠い過去の生活の様子を明らかにしたという事実に何か因縁めいたものを感じずにはおれません。

歴史は、開発の繰り返しの結果であります。故に開発は人間の本源的な欲求に基づく行為とも言えます。現代人は有史以来最大の開発力を持つに到りました。それだけに、私共は、過去の開発の足跡から歴史を明らかにする過程で、自身の未来を選択した先人の心を理解し、後世へ伝え、私共自身と子孫が誤った選択をしないための教訓とする必要があります。その心あってこそ、現代人は未来への開発資格が有るのだと申せましょう。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、株式会社埼玉ハウジングを始めとする関係者の皆様に感謝申し上げ、序といたします。

平成3年3月

深谷市教育委員会
教育長　鳥　塚　恵和男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市大字町田字西304－1外所在遺跡における、分譲住宅地造成に伴う遺跡発掘調査報告書である。事業名は、町田西遺跡発掘調査とした。

2．発掘調査は、事業者である株式会社埼玉ハウジングより委託を受け、深谷市教育委員会が主体となり実施した。現地発掘調査期間は平成2年6月4日～6月16日、調査面積は約300㎡である。

3．本書の執筆、編集及び写真撮影は、古池晋禄が行った。

4．図版中の北は磁北を示す。またレベルは特に注記の無い限り38.500mに統一した。報文中に示した遺構に関する数値は、原則として確認面においてのものである。

5．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

6．現地調査、本報告書の執筆・編集にあたり、下記の方々の御指導を頂いた。（敬称略）

小俣　悟　鳥羽　政之

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	鳥塚恵和男
		教育次長	永井　新八
事　務　局	深谷市教育委員会社会教育課	課　　長	永井　新八（兼務）
		課長補佐	須長　欣二
		文化財保護係長	田中嶋　功
		庶務係長	金子　信子
		主　　任	関根　広子
		主　　任	澤出　晃越
調査担当者	深谷市教育委員会社会教育課	主　　事	古池　晋禄

調査参加者　相沢　恵、宇賀地桂子、大原黎子、落合成子、加瀬律子、加藤佳子、神山智恵子
河合詔子、久米紀子、小沼和子、里山まり子、清水清子、鈴木令子、砂田伊久子
関口より子、高橋豊子、滝口知子、玉瀬静枝、都築百合子、友松扶慈子、西井れい子
細川ケイ、水野祥代、森　光代、湯沢直子、渡辺哲子

目　　次

序
例　言
目　次

Ⅰ．発掘調査に至る経緯……1

Ⅱ．遺跡の地理的、歴史的環境……1

Ⅲ．調査の概要……3

Ⅳ．検出遺構及び出土遺物……4

Ⅴ．結　語……17

写真図版

挿　図　目　次

第１図　周辺の主要遺跡位置図　（１／20,000）
第２図　調査区周辺地形図　（１／ 5,000）
第３図　調査区全測図　（１／ 120）
第４図　第１・２号住居跡平面図及び断面図（１／40）
第５図　土壙平面図及び断面図　（１／40）
第６図　土壙・柱穴平面図及び断面図　（１／40）
第７図　柱穴・溝平面図及び断面図　（１／40）
第８図　出土遺物実測図　（１／４）
第９図　出土遺物実測図　（１／４）
第10図　出土遺物実測図　（１／４）
第11図　出土遺物実測図　（１／４）
第12図　出土遺物実測図　（１／４・原寸）

○　町田西遺跡　報文中一覧表内略号及び各項目内表示

	項　目	表　示　内　容
遺　構	名　称	D：住居跡　H：土壙　P：柱穴
	規　模	（　）：最大検出値
	形　態	a：円形　b：楕円形　c：方形・長方形 1：不整形状　2：隅丸形状
	重複関係	→：新旧関係（旧→新）　＝：重複関係
遺　物	出土遺物	石質　(1)：角閃石質安山岩　(2)：結晶片岩　(3)：滑石　(4)：砂岩
	法　量	（　）：推定値又は最大現存値　＊：部位欠失により計測不能
	手　法	（部位）(a)：口縁部～頸部　(b)：胴部　(c)：底部　(d)：脚部　(e)：内面 （工具）H：篦　Y：指　B：ハケ （調整）K：削り　N：撫で 先→後：手法の工程　上／下：胴部の上下　内－外：脚部の内外
	特　徴	(1)胎土　S：砂粒（2㎜未満）R：小礫（2㎜以上）W：白色粒子　B：黒色粒子 (2)焼成　G：良好　L：やや不良　B：不良 (3)胎土色調　L：明色　D：暗色　O：橙色　R：赤色　Y：黄色　G：灰色　K：褐色 (4)釉薬色調　W：白色　M：緑色　B：青色　　例.　DO：暗橙色　LYK：明黄褐色

○計測値の単位は全て㎝に統一している。

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

深谷市は埼玉県北部に位置し、北方に利根川を挟んで群馬県と接する地域に広がる。室町時代には深谷上杉氏の根拠地として、また江戸時代には中山道や利根川水運等の交通・物流の要衝として繁栄してきた本市は、近年は県内有数の農業生産地であると同時に、ベットタウン地域としての発展も著しい。

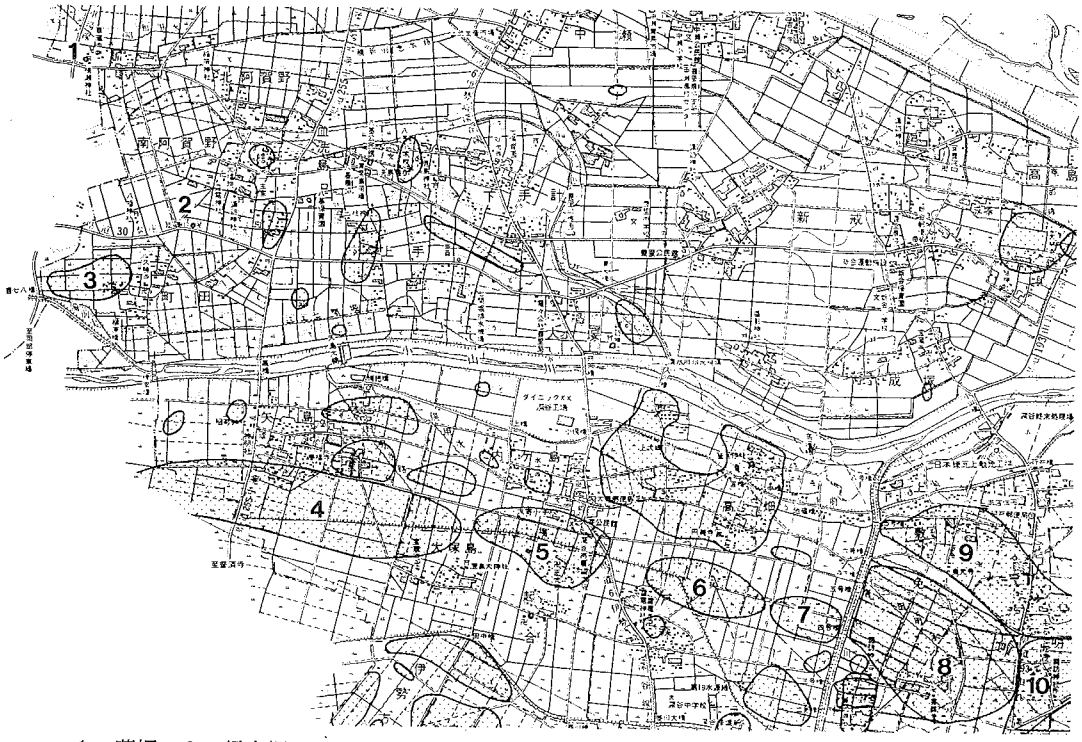
町田西遺跡の所在する深谷市大字町田地内は、近代日本経済の偉人、渋沢栄一の生地として知られる大字血洗島の南西、本庄市、岡部町と接する地域に位置している。ホウレンソウ、キュウリの他、ラン等のハウス栽培も盛んな典型的農産地帯であるが、平成２年２月の国道17号線深谷バイパスの開通を契機とした周辺地域の開発や、ＪＲ高崎線岡部駅まで自動車で約10分という環境もあいまって、大規模な住宅開発が予想される地域となっている。

平成２年５月、大字町田字西304－１～17における宅地造成計画が明らかとなり、市教育委員会は同５月16日、当該地の確認調査を実施した。その結果、柱穴等の遺構を確認、土師器を主体とする土器片を多数採集し、同地の発掘調査の必要が明らかとなった。この結果を受けて市教育委員会は事業者である株式会社埼玉ハウジングと協議の上、同地約300㎡に関する発掘調査の実施を決定、埋蔵文化財発掘調査通知（平成２年６月11日付深教社発第563号）を提出、調査に入った。

Ⅱ．遺跡周辺の地理的・歴史的環境

深谷市を概観すると、市内中央を走るＪＲ高崎線を境に、北部の妻沼低地と南部の櫛挽台地に分かれている。櫛挽台地は更に櫛挽面（武蔵野Ⅱ面に比定）と寄居面（別称　御稜威ヶ原面、立川面に比定）の二段丘面より構成され、櫛挽面北東端に残丘状の小丘稜である仙元山（標高98m）が存在するものの、一様に平坦と言う事ができる。標高は両段丘面と低地の境界付近で櫛挽面が40m～50m、寄居面が32～35m、妻沼低地で30～35mを測り、それぞれが比高差５～20m（櫛挽面）、２～５ｍ（寄居面）を以って接している。

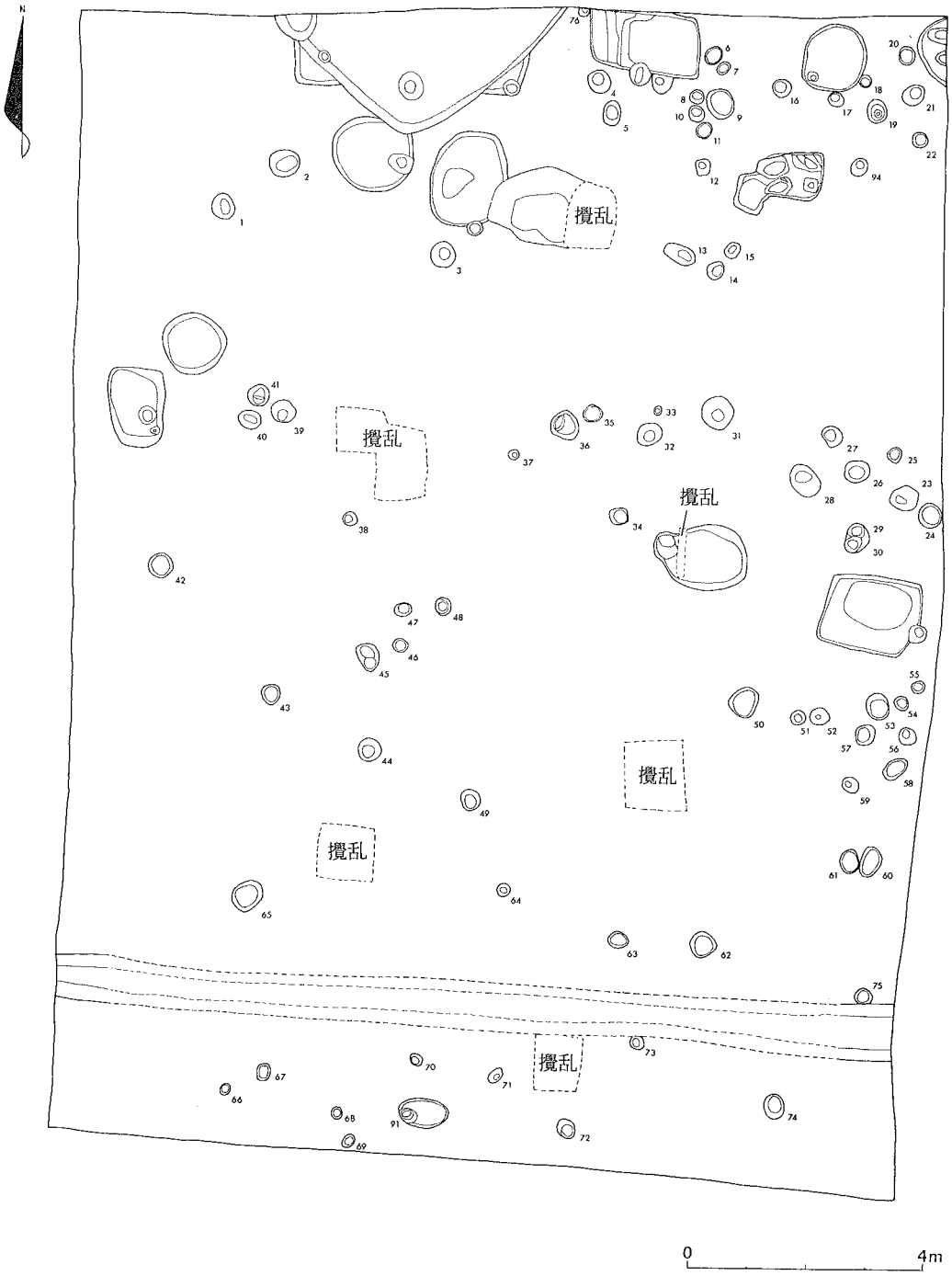
町田西遺跡は上述の妻沼低地上、利根川の支流である小山川北岸の自然堤防上に推定８ha以上の範囲を以って広がっている。今回の発掘調査地は本遺跡範囲の南西端部付近に位置している。標高は約39mを測る。本遺跡周辺の調査はこれまでには殆ど実施されておらず、歴史的背景には未だ不明な点が多い。しかし昭和62年の国道17号線深谷バイパス建設工事の伴う発掘調査により、小山川南岸一帯に古墳時代後期～平安時代の集落が確認され、今回の発掘調査で北岸にも集落の存在が確認された事から、小山川両岸の自然堤防上を中心とした集落の形成が明らかとなった。その後、鎌倉時代には現在の小山川と備前渠に挟まれた一帯を中心とした村落が存在し、後の小山川の氾濫により流亡、村人は現在の深谷市大字町田と岡部町大字岡に分住したという伝承が地元に残っている。具体的証拠は乏しいが、該期にも集落が形成されていた可能性は高い。室町時代以降は、町田地内に真言宗寺院である久勝寺が創建される等の状況から、既に集落としての基礎は安定しており、今日に至っているのもと考えられる。



1．藤塚　2．行人塚　3．町田西遺跡　4．矢島南遺跡　5．起合遺跡　6．戸森松原遺跡
7．森下遺跡　8．上敷免遺跡　9．上敷免北遺跡　10．本郷前東遺跡
※スクリーントーンは古墳時代～平安時代の遺跡

第１図　周辺の主要遺跡位置図（１／20,000）

第２図　調査区周辺地形図（１／5,000）
※スクリーントーンは発掘調査区



第３図　調査区全測図（１／120）

Ⅲ．調査の概要

平成２年６月１日、重機による調査区の表土削除を開始、同４日より作業員による調査を開始した。

精査の後、検出された土壙及び柱穴の調査に順次着手、同時に確認された住居跡についても調査を開始する。住居跡はかなり撹乱されており、プランに一部不明な部分も在ったが、８日、これが２軒の切り合いである事を確認、先に構築されていた住居床面より廃棄されたと思われる大量かつ多種の土師器が出土した。これにより、住居跡の調査はこれらの大量の土師器の記録及び取上げを主体として進める事となった。一方、土壙及び柱穴は検出された殆どの調査が終了、この内に青磁破片を出土する土壙がふくまれており、中世の遺構・遺物の存在も確認された。住居内の土師器は、18日までには記録及び取上げが完了、土層断面及び遺構平面の記録を経て住居跡の調査を終了した。土壙及び柱穴の調査終了後、調査区南半にて確認した溝状遺構の調査を終えた後、調査区の遠景及び全景、各遺構の写真撮影を行い、６月20日、全調査を終了した。

Ⅳ．検出遺構及び出土遺物（第４図～第12図）

１．検出遺構（第４図～第７図）

今回の発掘調査による検出遺構は、住居跡２軒、土壙及び柱穴106基、溝跡１条である。この内古墳時代後期の所産とみられる遺構として住居跡２軒と土壙及び柱穴62基、溝跡１条、中世の所産とみられる遺構として土壙及び柱穴５基が確認された。この節では住居跡以外の遺構については全て一覧表にまとめて記述するものとする。

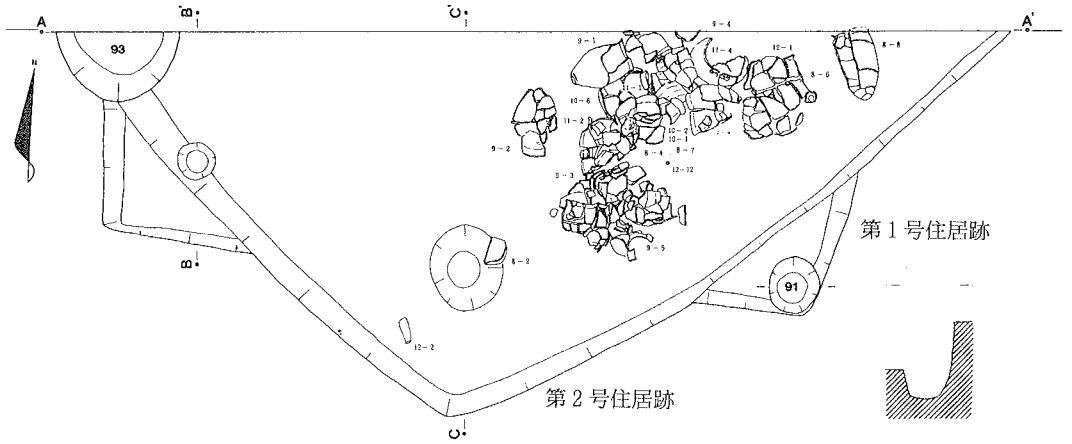
(1) 住居跡

○第１号住居跡（第４図）

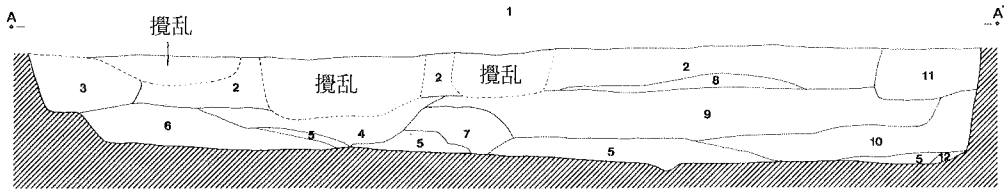
調査区北西端部に位置する。大半が調査区外のため、正確な規模・形態・主軸方向等は不明だが南辺のみ3.75mを測る。深さ23～27㎝、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は無い。柱穴１基を検出した。検出範囲の約１／３が撹乱を受けており、一部は床面に及んでいる。第２号住居跡埋没後構築されている。南壁中央部（第２号住居南隅部）から土師器片多数と支脚が出土し、また延長上の第１号土壙壁面に煙道らしき焼土層の一部も検出されたため、本住居跡のカマドとも考えられたが、遺構の遺存度が悪く、確認には至らなかった。

○第２号住居跡（第４図）

第１号住居跡とほぼ重複して構築されている。南東～南西壁面のみの検出で、カマドを含む過半が調査区外のため、正確な規模、形態等は不明だが、主軸方向は北東乃至北西で、第１号住居跡より約45°の変移が推定される。深さ48～59㎝、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は無い。柱穴１基を検出した。床面直上より、廃棄されたと思われる土師器が合計28個体出土した。内訳は坏１、高坏１、瓶17、甑３、壷６である。



※図中の数字は図版番号。

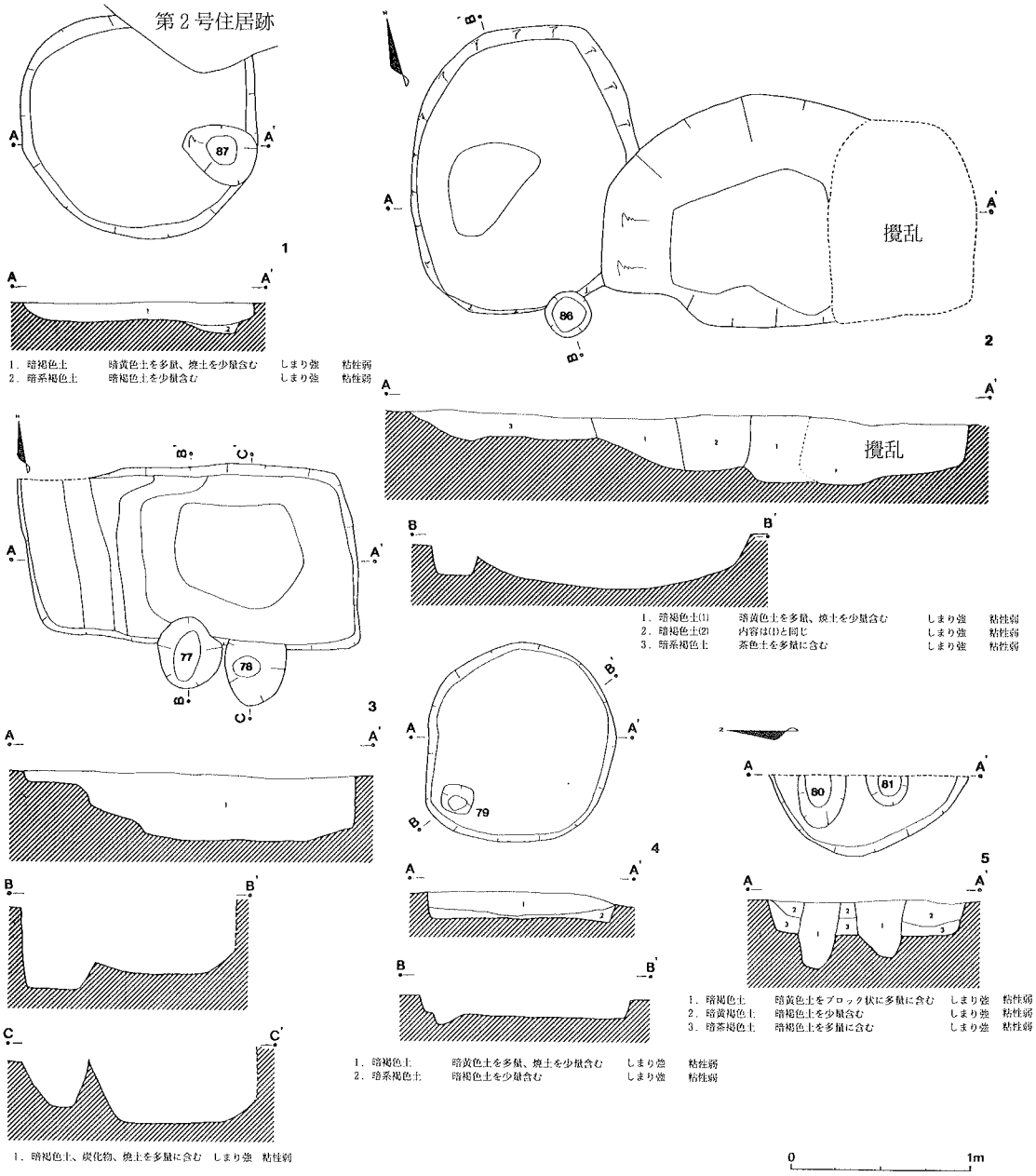


1．表土	耕作土、暗黄灰褐色を呈する		
2．暗黄褐色土	焼土、炭化物を少量含む	しまり強	粘性弱
3．暗黒色土	暗黄色土をブロック状に多量に含む	しまり強	粘性弱
4．暗褐色土	焼土を多量に含む	しまりやや強	粘性弱
5．暗灰色土(1)	暗黄色土を多量に含む	しまり強	粘性弱
6．暗橙色土	暗灰色土を多量に含む	しまり強	粘性弱
7．明黄色土(1)	暗褐色色土を多量に含む	しまり強	粘性弱
8．炭化物層(1)			
9．暗灰色土(2)	明黄色土を多量に含む	しまり強	粘性弱
10．明黄色土(2)	暗灰色土を多量に含む	しまり強	粘性弱
11．暗灰色土(3)	焼土、白色粒子を多量に含む	しまり強	粘性弱
12．炭化物質(2)	焼土を多量に含む		

第4図　第1・2号住居跡平面図及び断面図（1／40）

(2)　土壙一覧表（単位：cm）

No.	図版	南北－東西－深さ	形態	主軸方向	重複関係	出土遺物	備考
1	5- 1	127 － 132 － 10	a	N	D 2→D 1→　＝P87	土師器	
2	- 1	153 － 126 － 13	b	N－5°－E	→H 3　＝P86	土師器　須恵器　礫片(2)	
3	- 2	133 －(127)－(31)	b	N－65°－W		土師器　須恵器　礫片(2)	一部攪乱
4	- 3	104 － 186 － 37	c 2	N－80°－W	＝P77・78	土師器	
5	- 4	113 － 105 － 15	a	N		土師器	



第5図　土壙平面図及び断面図（1／40）

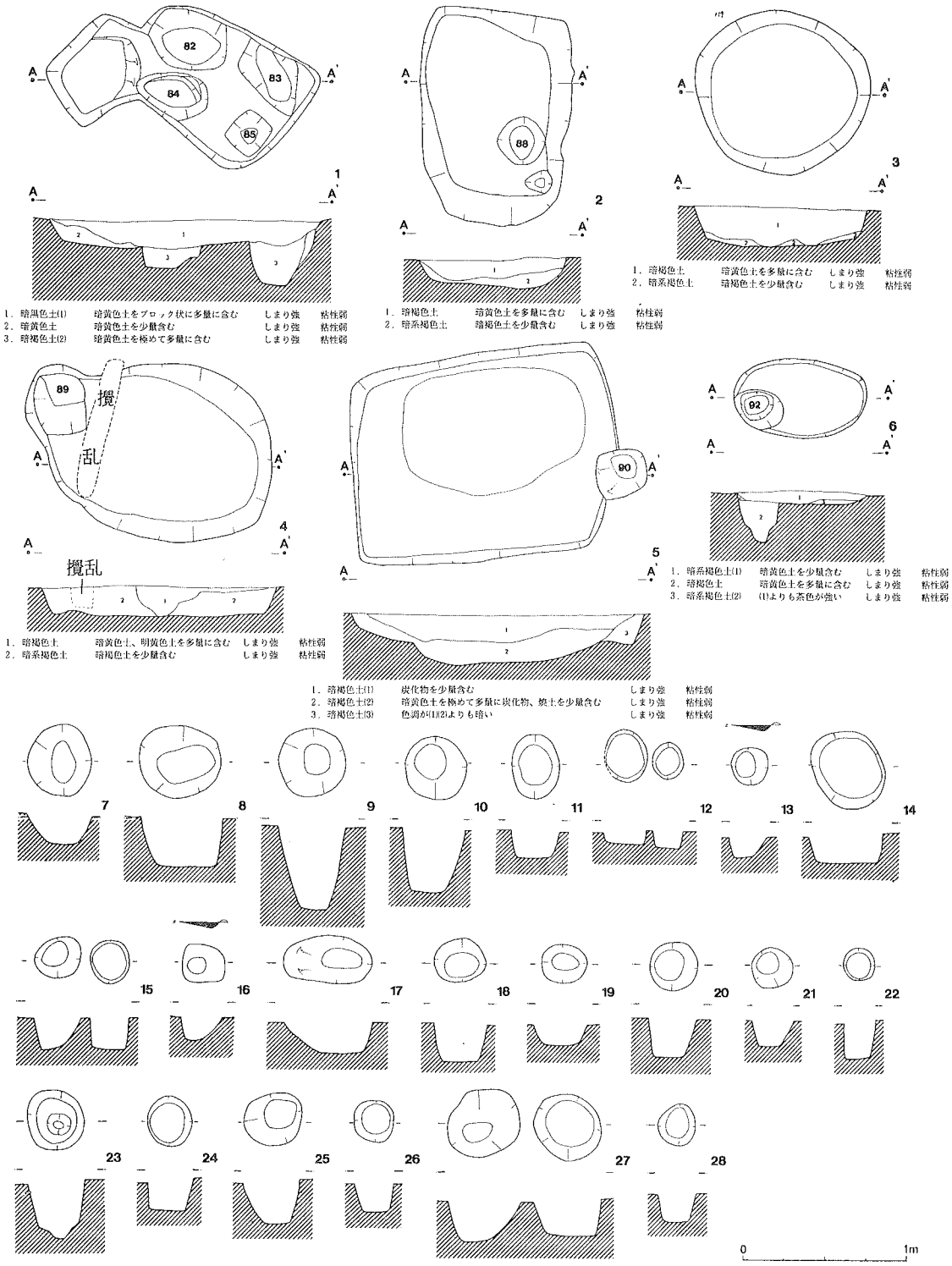
No.	図版	南北－東西－深さ	形態	主軸方向	重複関係	出土遺物	備考
6	5-5	113 －(47)－ 19	a	N？	→P80・81	土師器　礫片(2)	一部調査区外
7	6-1	67 － 49 － 16	c1	N－20° －E		土師器　石製品(1)	

No.	図版	南北－東西－深さ	形態	主軸方向	重複関係	出土遺物	備考
8	6- 1	75 － 111 － 18	c 1	N－85° －W	H 7 → ＝P82～85	土師器　須恵器	
9	- 2	135 － 93 － 20	c 1	N	＝P88	土師器	
10	- 3	104 － 107 － 25	a	N		土師器　青磁　臼玉(3)	
11	- 4	112 － 139 － 17	b	N－85° －W	＝P89	土師器　青磁	一部撹乱
12	- 5	130 － 164 － 30	c 1	N－78° －W	＝P90	土師器　須恵器　常滑系土器	
13	- 6	50 － 82 － 9	b	N－85° －W	＝P92	土師器	

(3)　柱穴一覧表（単位：cm）

No.	図版	南北－東西－深さ	形態	出土遺物　他
1	6- 7	44 － 40 － 17	a	土師器
2	- 8	45 － 51 － 30	a	土師器
3	- 9	43 － 42 － 51	a	土師器
4	-10	39 － 37 － 39	a	土師器
5	-11	40 － 30 － 16	b	土師器
6	-12	33 －(27)－ 8	a	常滑系土器
7	-12	23 － 20 － 9	a	
8	-13	23 － 23 － 12	a	土師器
9	-14	49 － 44 － 19	b	土師器　灰釉陶器
10	-15	25 － 28 － 20	a	
11	-15	27 － 24 － 20	a	
12	-16	27 － 24 － 14	c 2	土師器
13	-17	30 － 55 － 19	b	
14	-18	27 － 32 － 24	a	土師器
15	6-19	24 － 28 － 13	a	土師器
16	-20	30 － 30 － 23	a	
17	-21	25 － 25 － 15	a	土師器
18	-22	20 － 20 － 23	a	土師器
19	-23	37 － 35 － 37	a	常滑系土器
20	-24	33 － 28 － 20	a	
21	-25	32 － 35 － 28	a	土師器

No.	図版	東西－南北－深さ	形態	出土遺物　他
22	6-26	26 － 24 － 18	a	
23	-27	42 － 45 － 24	a 1	
24	-27	42 － 42 － 24	a	土師器　須恵器
25	-28	26 － 23 － 17	a 1	土師器
26	7- 1	40 － 43 － 27	a	土師器
27	- 2	36 － 35 － 27	a 1	
28	- 3	58 － 47 － 72	b	土師器
29	- 4	(24)－ 38 － 46	a 1	土師器
30	- 4	(26)－ 36 － 43	a 1	土師器
31	- 5	55 － 53 － 32	a	
32	- 6	38 － 43 － 26	a 1	土師器
33	- 6	16 － 13 － 6	a	
34	- 7	29 － 31 － 14	c 2	
35	- 8	29 － 31 － 12	c 2	土師器
36	- 9	49 － 47 － 46	a 1	土師器
37	-10	17 － 18 － 12	a	
38	-11	22 － 22 － 12	a	土師器
39	-12	39 － 41 － 52	a	土師器
40	-13	37 － 34 － 22	a	土師器
41	-13	35 － 37 － 28	a	土師器　礫片(2)
42	-14	42 － 42 － 28	a	土師器



第６図　土壙・柱穴平面図及び断面図（１／40）

No.	図版	南北－東西－深さ	形態	出土遺物　他
43	7-15	33 － 31 － 22	a	土師器
44	-16	39 － 38 － 34	a	土師器
45	-17	47 － 35 － 27	b 1	土師器　須恵器
46	-18	22 － 24 － 34	a	
47	-19	23 － 27 － 14	c 2	
48	-20	30 － 29 － 40	a	土師器　須恵器
49	-21	34 － 34 － 27	a 1	土師器
50	-22	51 － 47 － 37	b 1	土師器
51	-23	25 － 25 － 32	a	土師器
52	-23	30 － 32 － 20	a	
53	-24	44 － 39 － 29	a	土師器
54	-24	24 － 22 － 19	a	
55	-25	22 － 21 － 9	a 1	
56	-26	27 － 27 － 28	a	土師器
57	-27	41 － 35 － 24	a 1	土師器
58	-28	46 － 28 － 15	b	土師器
59	-29	29 － 27 － 15	a	
60	-30	52 － 32 － 23	b 1	土師器　須恵器
61	-31	39 － 32 － 27	b	土師器　灰釉陶器
62	-32	44 － 47 － 24	a 1	
63	-33	28 － 36 － 17	b 1	
64	-34	22 － 24 － 15	a	土師器
65	-35	53 － 52 － 30	b 1	土師器　礫片(1)
66	-36	18 － 17 － 10	a	
67	-37	28 － 21 － 8	c 2	土師器　須恵器
68	-38	20 － 21 － 17	a	
69	-39	24 － 21 － 13	a 1	
70	-40	21 － 20 － 17	a	
71	-41	28 － 21 － 22	b	土師器

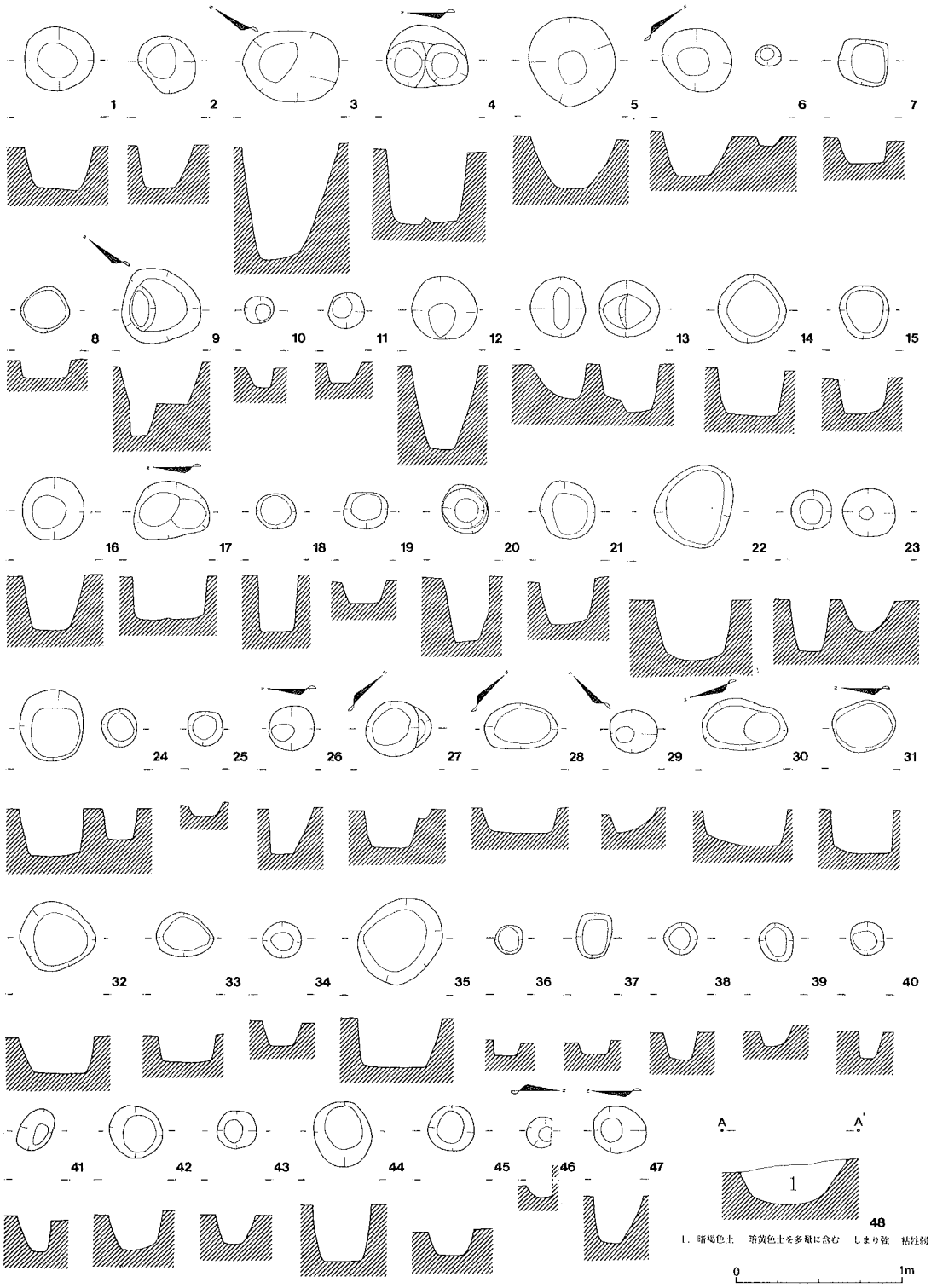
No.	図版	東西－南北－深さ	形態	出土遺物　他
72	7-42	32 － 32 － 24	a	土師器　灰釉陶器
73	-43	24 － 24 － 18	a	土師器
74	-44	40 － 35 － 35	a	土師器
74	-45	28 － 29 － 16	a	
76	-46	(16)－ 19 － 8	a	
77	5- 3	(41)－ 38 － 48	a 1	
78	- 3	(37)－ 35 － 27	b	土師器
79	- 4	16 － 18 － (6)	c 2	土師器　砥石
80	- 5	27 －(31)－ 38	b	土師器
81	- 5	24 －(17)－ 32	a 1	
82	6- 1	41 － 51 － (8)	b 1	土師器
83	- 1	29 － 41 － 41	c 1	
84	- 1	30 － 45 － 29	b 1	土師器
85	- 1	25 － 23 － 30	c 2	土師器
86	5- 1	26 － 26 － 17	a	
87	- 1	34 － 43 － 18	b 1	
88	6- 1	30 － 30 －(19)	a 1	
89	- 4	(49)－(43)－ 15	a 1	
90	- 5	30 － 32 － 19	c 2	土師器
91	4	32 － 27 － 15	a	D 1→
92	6- 6	25 － 29 － 31	b 1	土師器
93	4	(38)－ 65 － 30	a	D 2→
94	7-47	32 － 29 － 30	a	土師器

(4)　溝跡（単位：cm）

No.	図版	幅－現長－深さ	出土遺物　他
1	7-48	66 －1430－ 24	土師器

2．出土遺物（第８図～第12図）

今回の発掘調査による出土遺物は、古墳時代後期を主体として中世にまで及んでいる。本節では遺物の概要を土器類、土製品、鉄製品、石製品、玉類の５群に分け、一覧表とした。



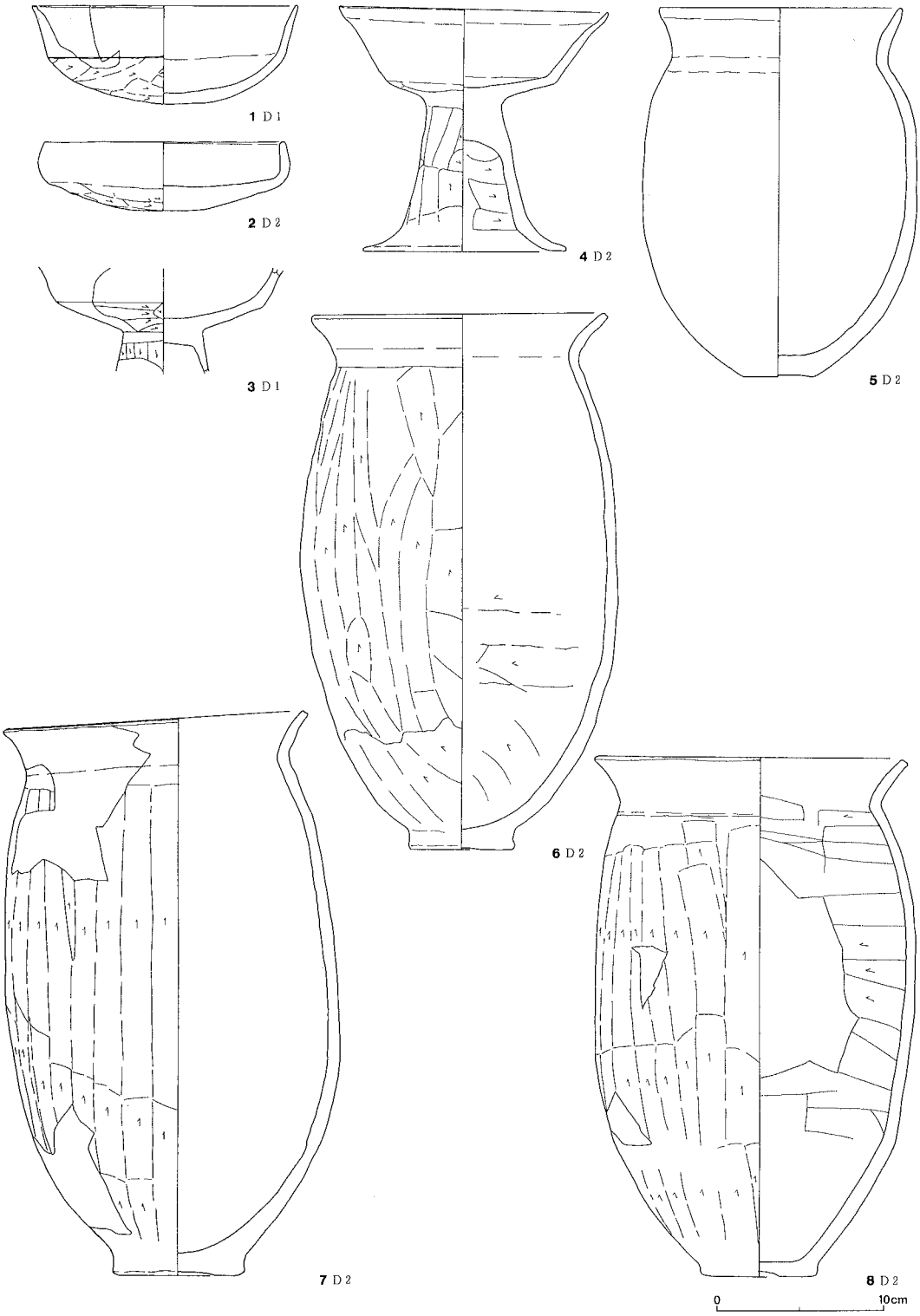
第７図　柱穴・溝跡平面図及び断面図（１／40）

この内、土器については主に住居跡出土の個体資料及び土壙・柱穴出土の中世陶磁を記載している。無論この他にも土師器・須恵器等多数出土しているが、その殆どが原形を窺い得ない小破片である事から、出土の事実記載に留める事とした（Ｐ５～Ｐ９参照）。

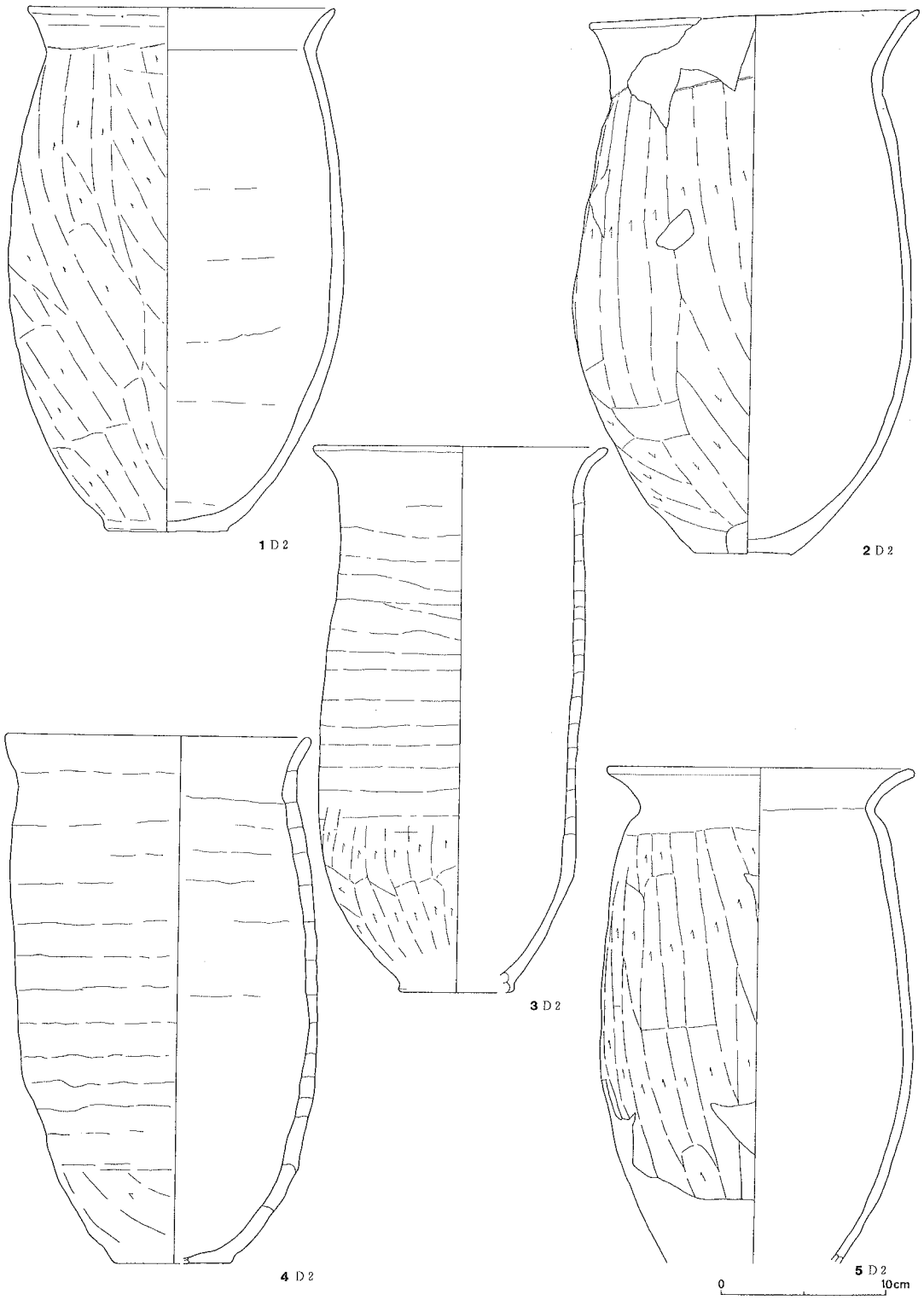
i　土器類

※個体資料は住居跡出土。第２号住居跡出土土器は、28個体中22個体を図示し、図中に出土住居番号を表示した。

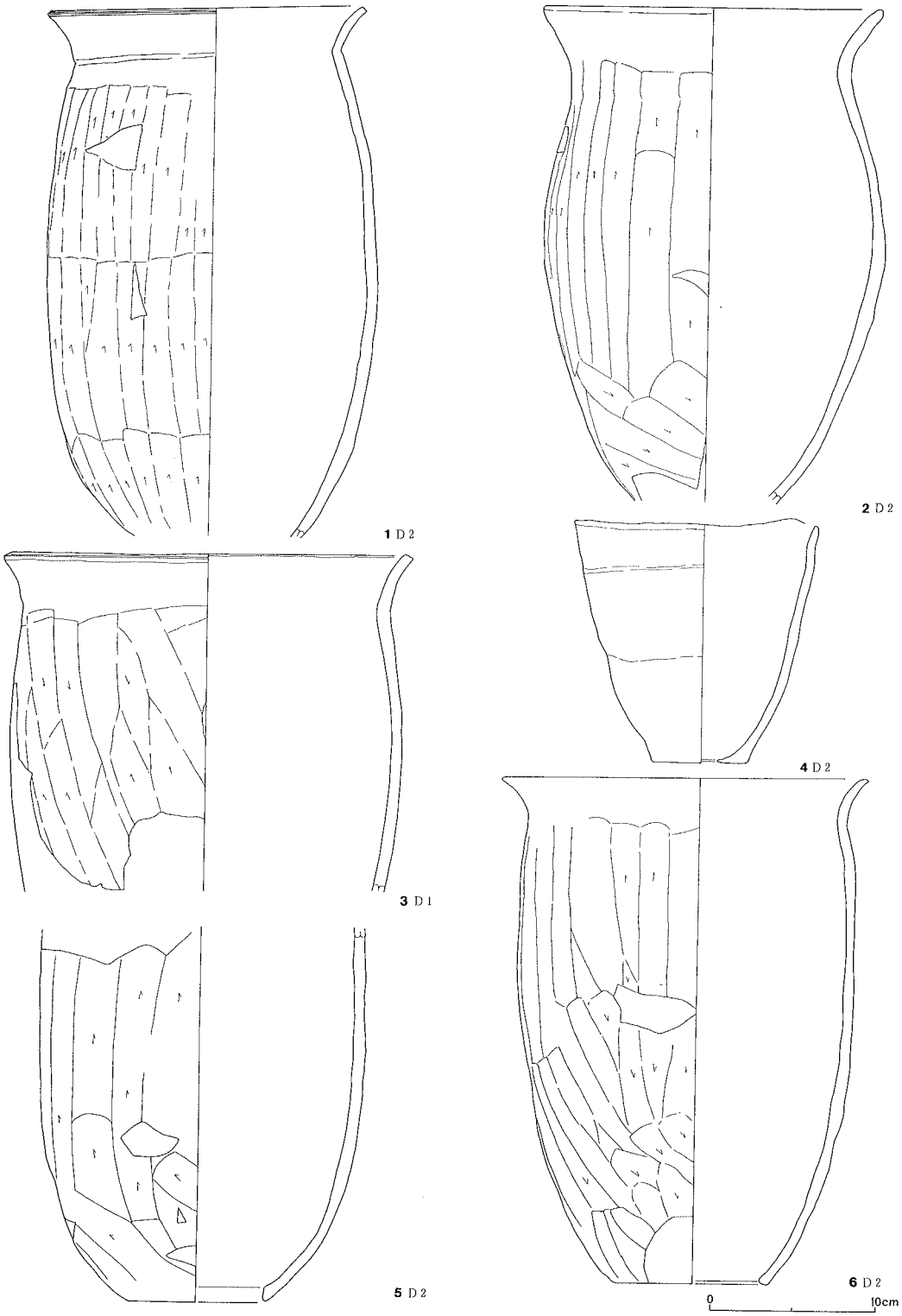
図版	器種	口径－胴径－底径－器高	手法	特徴	残存
8－1	杯	(16.0)- ＊ -＊ - 6.0	(a)YN (c)HK (e)YN	(1)S (2)L (3)OGW 風化剥落顕著	2／5
－2	坏	(14.6)- ＊ -＊ - 4.2	(a)YN (c)HK→HN (e)YN	(1)S. B (2)G (3)DRO	3／5
－3	高坏	(14.5)- ＊ -(5.4)-(7.0)	(a)YN (c)HK (d)HK－HK (e)YN	(1)S. B (2)G (3)DO	2／5
－4	高坏	16.4 - ＊ -12.4 - 16.4	(a)YN (c)HK (d)HK－HK (e)YN	(1)S. R. B (2)G (3)LYW 風化剥落顕著	3／4
－5	小型甕	(14.6)-(16.5)- 4.2 -(22.5)	(a)YN (b) ? (c)HN (e)HN	(1)S (2)G (3)DO	2／5
－6	甕	18.4 -19.2 - 6.2 - 33.0	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)S. R. B (2)G (3)DR 下半一部剥落	5／6
－7	甕	18.5 -20.1 - 7.8 - 34.5	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)S (2)G (3)DRO 口唇部に沈線	3／4
－8	甕	18.8 -19.3 - 7.0 - 31.6	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)S. W (2)G (3)DOW 下半一部剥落	3／4
9－1	甕	18.8 -20.6 - 7.6 - 32.6	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)S. B (2)G (3)RO	5／6
－2	甕	20.0 -20.8 - 6.0 - 34.0	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)S. R. B. W (2)G (3)YO 下半一部剥落	3／4
－3	甕	17.8 -15.8 -(6.8)- 34.0	(a)YN (b)YN／HK (e)HN	(1)S. W (2)G (3)YO 輪積痕明瞭	3／4
－4	甕	(18.6)-18.5 - 7.4 - 32.8	(a)YN (b)YN／HK (c)HN (e)HK	(1)S. B (2)G (3)RO 輪積痕明瞭	3／4
－5	甕	18.9 -19.2 - ＊ -(31.0)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. B (2)G (3)DGO	2／3
10－1	甕	19.4 -20.1 - ＊ -(32.7)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. W (2)L (3)DO 口唇部に沈線	4／5
－2	甕	20.4 -20.8 - ＊ -(30.4)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. R. B (2)B (3)DO	2／3
－3	甕	24.7 -23.9 - ＊ -(22.0)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. B (2)B (3)DO 口唇部に沈線	2／5
－4	小型甕	14.6 - ＊ - 5.8 - 15.0	(a)YN (b)YN? (e)HN	(1)S (2)G (3)LYK 底部焼成後穿孔	3／4
－5	甑	＊ -19.7 - 8.4 -(22.7)	(b)HK (e)HN	(1)S. W (2)L (3)DYO 一部剥落	1／4
－6	甑	(22.2)-20.4 - 9.3 - 31.2	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. W (2)G (3)DO	2／3
11－1	小型壺	10.1 -14.8 - 5.3 - 15.2	(a)YN (b)B／HK (c)HK	(1)S. B (2)G (3)DYO 口唇部摘み上げ	4／5
－2	小型壺	16.6 -21.1 - 6.0 - 22.9	(a)YN (b)YN (c)HK (e)HN	(1)S. W (2)L (3)DO 輪積痕明瞭	4／5
－3	小型壺	17.5 -20.6 - ＊ -(18.0)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. B (2)L (3)DO 整形痕不明瞭	1／2
－4	壺	21.5 -29.0 - 8.0 - 29.3	(a)YN (b)HK (c)HN (e)HN	(1)B. W (2)L (3)DOR 口唇部に沈線	4／5
－5	壺	21.3 -31.1 - ＊ -(31.0)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. B (2)L (3)DYO 口縁部屈曲	3／4
12－1	壺	23.6 -29.5 - ＊ -(30.2)	(a)YN (b)HK (e)HN	(1)S. R. B (2)L (3)DO 口縁部ほぼ直立	3／4



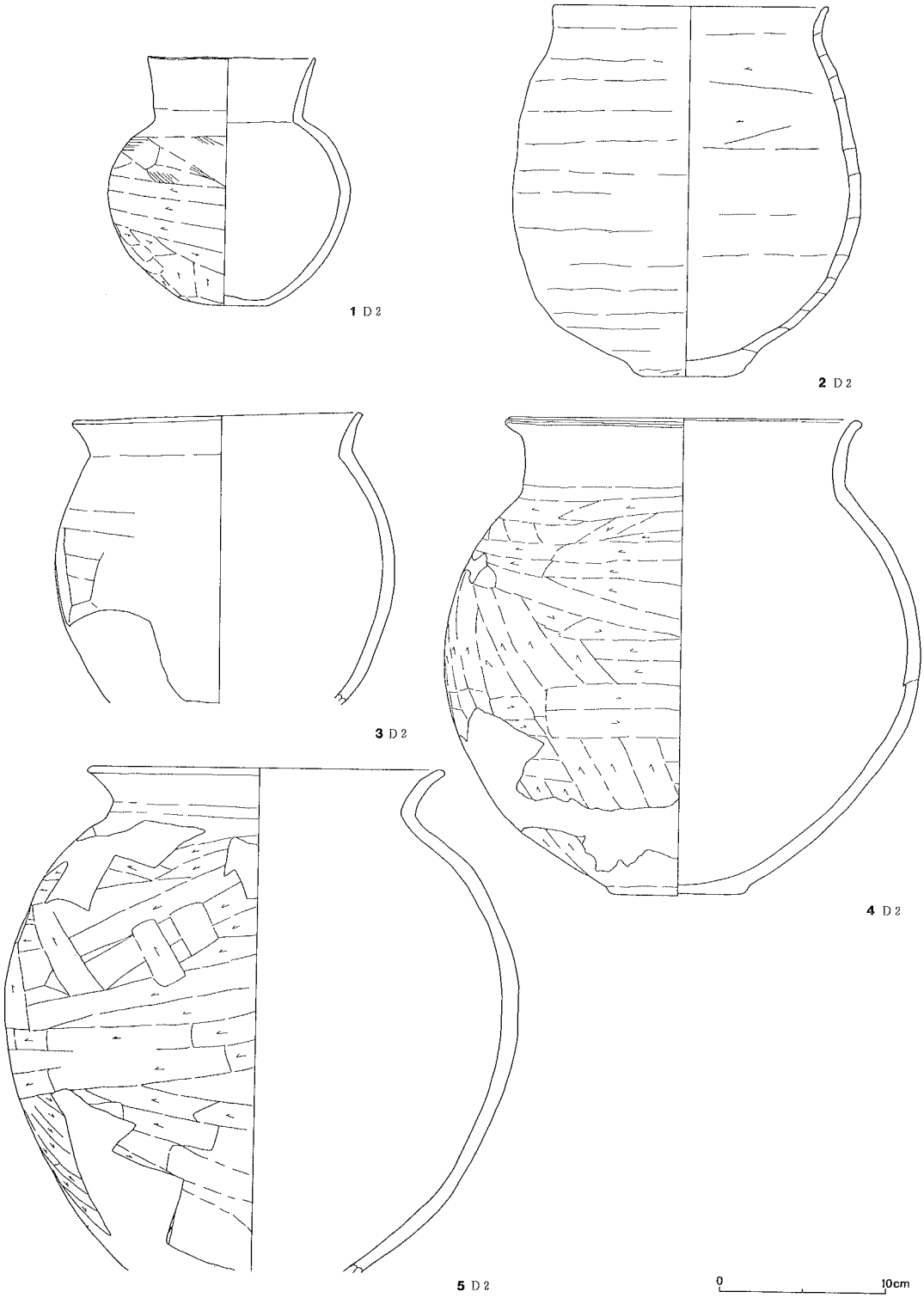
第8図　出土遺物実測図（1／4）



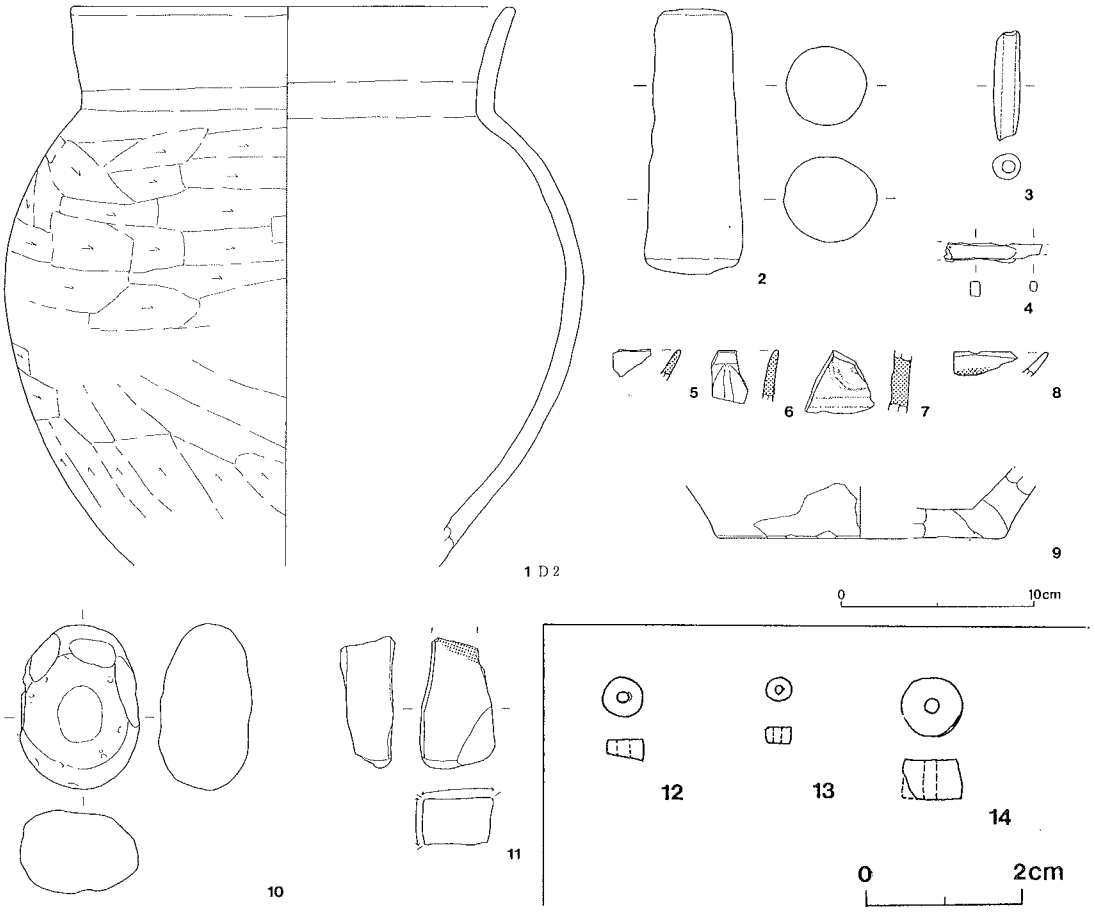
第9図　出土遺物実測図（1／4）



第10図　出土遺物実測図（1／4）



第11図　出土遺物実測図（1／4）



第12図　出土遺物実測図（1／4・玉類は原寸）

図版	種別	遺構	部位	特　　徴
12-5	青磁	H10	(a)	(1)B　(2)G　(3)LG　(4)LGM　無文
-6	青磁	H11	(a)	(1)B　(2)G　(3)DG　(4)DG　連華文描出
-7	青磁	H11	(b)	(1)B　(2)G　(3)LGW　(4)BW　線刻文描出　内面に下地の暗黄褐色釉を残す
-8	灰釉陶器	H12	(a)	(1)B　(2)G　(3)DG
-9	常滑系	P72	(c)	(1)B　(2)G　(3)DYG　壷型土器　推定底径14.8㎝

ii　土製品（単位：㎝・g）

図版	名称	直径	全長	重量	遺構	特　　徴
12-2	支脚	5.1	14.0	410	D1	(1)S.B.W.　(2)G　(3)DO　中実　全体に粗い撫で整形

図版	名称	直径	孔径	全長	重量	遺構	特　　徴
12-3	土錘	1.4	0.7	5.9	10	D1	(1)S.R.W.　(2)G　(3)DO　両端部の整形等は粗雑

iii　鉄製品（単位：cm・g）

図版	名称	現長	厚さ	重量	遺構	特　　徴
12-4	刀子	5.2	0.5	12.0	D1	基部のみ　腐食顕著　断面長方形を呈する

iii　石製品（単位：cm・g）

図版	名称	直径	短径	厚さ	重量	遺構	特　　徴
12-10	磨石	8.7	6.1	4.8	190	H7	図中正面中央部に磨滅痕を残す　一部欠損　石質(1)
-11	砥石	7.0	3.9	2.4	100	P79	一部欠失　欠損部に被熱による黒化を残す　石質(4)

v　玉類（単位：cm・g）

図版	種類	直径	孔径	全長	重量	遺構	特　　徴
12-12	臼玉	0.8	0.25	0.4	0.3	D2	石質(3)　蠟石に近似
-13	臼玉	0.5	0.15	0.35	0.1	H10	石質(3)
-14	臼玉	1.2	0.25	0.8	1.7	表採	一部欠損　石質(3)　蠟石に近似

V. 結　　語

今回の発掘調査は、市教育委員会による豊里地域初の調査である。その結果、昭和62年度の県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査による小山川南岸の集落の確認に続いて、北岸の集落も確認された事となる。そこで本章では、遺構・遺物等を概観し、今回の成果を総括してみた。当地の発掘調査として初めて住居跡を検出したが、第2号住居跡出土の多量の土師器は、その数量から住居複数軒よりの廃棄の可能性が有り、該期の集落形成が想定し得る。また第2号住居跡と重複した第1号住居跡の構築の形跡は、その一定期間の継続を示唆している。同時に検出された柱穴群は、出土遺物より相対的には住居の存続時間内に平行しており、住居と掘立柱建物が併存した可能性は高い。但し、両者ともに調査は不充分であり、現段階では推測の域を出ない。今後の調査成果に期する所である。遺物的には第2号住居跡出土の土師器が、所謂鬼高Ⅰ式期末～鬼高Ⅱ式期初頭、6世紀中葉～後葉の当地域の一括資料として、今後の周辺地域調査にも貴重である。また第1号住居跡出土の刀子や土錘は、雑器以外の生活遺物であり、特に土錘は1点だけとはいえ、生業としての漁労の存在を示唆し得る遺物である。当地域は、過去にも農作業時に土錘が出土しており、筆者も発掘調査中にその1つを実見した。土錘自体が時代的な形態変化に極めて乏しいため、この2点で論ずる事は全く不可能だが、当地域に

生業としての存在の可能性の傍証にはなり得よう。第２号住居跡及び第10号土壙出土の滑石製臼玉は装飾的目的と同時に祭祀的目的の存在をも暗示する。両者を含めて、現在は遺跡南方を流れる小山川の前身である河川が焦点となり得るのではないだろうか。また、玉製品自体の生産・流通の動向からも、当地域を考えていかねばならないだろう。

一方、中世遺構の存在も確認した。第12号土壙は、平面隅丸方形を呈し、覆土中に焼土、炭化物を含む土壙だが、同様の土壙が市内、東方城山遺跡群や東方城跡における発掘調査（註１）でも多数検出されており、周辺市町村でも近年調査例が増加している。遺物を殆ど伴わないため、その機能等には不明な点も多いが、主軸方向に斉一性が認められる点から、墓壙の可能性も論じられている。本土壙の場合は、常滑系らしき壷型土器の低部破片が２点（恐らく同一個体）出土しており、それらと同時期の可能性が考えられる。第４号土壙にも、平面形態、覆土、主軸方向等の共通点が多いが、出土遺物の時代が異なるため、即断はできない。柱穴にも同時期の出土遺物を持つものが３基検出されている。当地に掘立柱による何らかの施設が存在していた可能性を示唆している。遺物は計３点の青磁破片の出土が挙げられる。特に第11号土壙出土の２点の内の１点は元代龍泉窯の特徴を有し、３点中で最古の位置付けが出来よう。残りの２点は明代の所産と思われる。今回の検出遺構の年代を決定づける確証は無いものの、これらの舶来磁器の存在により、上限が14世紀前半に設定し得よう。但し、これらの舶来磁器の類は伝世する場合も多く、遺構年代自体は14世紀後半以降と考えるのが妥当だろう。同時にこの様な出土遺物は、これを所有し得る勢力的・経済的背景を持つ存在を前提としており、当地域における支配集団の存在を示唆すると考えられよう。Ⅱ章に記した「鎌倉時代の村」伝承も再考する必要がある。

この他、遺物のみだが、両面ハケ目調整の土師器片や、底部糸切りの須恵器坏等の小片が出土している。流れ込みによると思われるが、これは周辺地域の歴史幅を今回確認の遺跡年代より広げ得るものである。また須恵器坏破片の１点には白色針状物質が含まれており、鳩山窯跡群の所産の可能性が高い。今後の調査による遺跡の様相のより一層の明確化を期待したい。

今回の調査範囲は約 300㎡と狭く、各時代の集落様相の把握には至らなかった。しかし、この調査成果は、従来の豊里地域の歴史的認識を変え得るものである。隣接する本庄市、岡部町等の成果とも考え合わせ、より一層の地域的調査研究を進めていく必要があるだろう。

筆者の浅学の故、調査から報告書刊を通じ数々の問題点を残してしまった。深くお詫びすると共に、今後より一層の御指導、御鞭撻をお願いする次第である。

註１　澤出晃越　「東方城山遺跡群」　埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

　　澤出晃越　「東方城跡」　埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第20集

1．遺跡遠景
（小山川土手より臨む、矢印下　町田西遺跡発掘調査区）

2．発掘調査区全景（南西より）

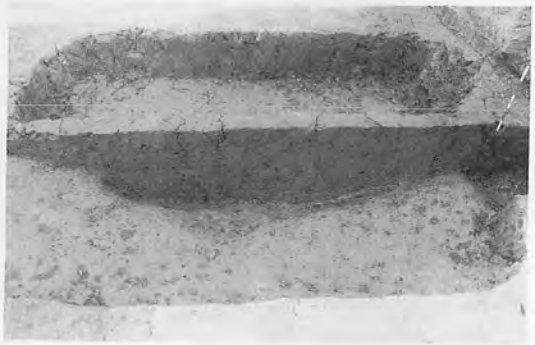
3．発掘調査区全景（北東より）

4．作業風景

5．第１号・第２号住居跡

6．第２号住居跡　遺物出土状態

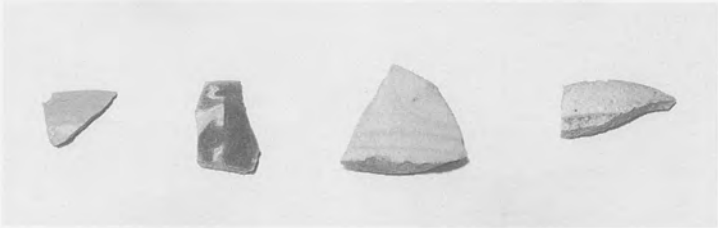
7．第４号土壙



8．第12号土壙

第１号・第２号住居跡出土土器

第２号住居跡出土土器



第２号住居跡出土土器（上段）　住居跡・土壙・柱穴出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第31集

町　田　西　遺　跡

印　刷　　平成3年3月22日
発　行　　平成3年3月29日
発行　　深　谷　市　教　育　委　員　会
印刷　　大　屋　印　刷　株　式　会　社

「町田西遺跡」　正誤表

訂正箇所	誤	正
第1図　遺跡名	5．起合遺跡	5．起会遺跡
P4　35行目	瓶	甕
第4図土層注記	12．炭化物質(2)	12．炭化物層(2)
第5図・第6図 土層注記	暗系褐色土	暗茶褐色土

○　報文中一覧表内略号及び各項目内表示

〈誤〉

遺物	手法	(部位)
		(a)口縁部～頸部

〈正〉

遺物	手法	(部位)
		(a)口縁部～頸部

※報文中の土壙・柱穴一覧表の寸法は、全て（南北－東西－深さ）に統一

(2)土壙一覧表

〈誤〉

No.	図版	出土遺物
2 12	-1 -5	土師器　須恵器　常滑系土器

〈正〉

No.	図版	出土遺物
2 12	-2 -5	土師器　須恵器　灰釉陶器

(3)柱穴一覧表

〈誤〉

No.	図版	南北－東西－深さ
49 88	-21 6-1	34 － 34 － 27

〈正〉

No.	図版	南北－東西－深さ
49 88	-21 6-2	35 － 34 － 27

i　土器類

〈誤〉

図版	器種	手法
9-4 10-4	甕 小型甕	(e)HK

図版	器種	特徴
11-1 11-4	甑 壺	(3)DYO (3)DOR

〈正〉

図版	器種	手法
9-4 10-4	甕 小型甕	(e)HN

図版	器種	特徴
11-1 11-4	甑 壺	(3)DYK (3)DRO